

児童期の情動発達とその特異性に関する研究 11

—「気になる」児童の共感に影響する要因の検討—

○飯島典子（宮城教育大学）
相澤雅文（京都教育大学）
平川久美子（石巻専修大学）

高橋千枝（東北学院大学）
本郷一夫（東北大学）

キーワード：共感、「気になる」子、児童

問題と目的

本研究は、幼児期から児童期における情動発達のアセスメント・スケールを開発することを目的とした研究の一部である。このうち、本研究では日本教育心理学会第 59 回総会（2017）における報告（2017 年；1~5），日本発達心理学会第 29 回大会における報告（2018 年；6~8）に続き、研究 1 で「気になる」児童と典型発達児との間で情動発達得点の差が顕著だった＜共感＞に着目した。とりわけ、「気になる」児童の共感に影響する要因について探索的に検討することを目的とした。

方 法

1. 調査対象： 研究 9 と同じ。このうち本報告では、「気になる」児童 1017 名（男児 848 名、女児 223 名）のデータを分析した。

2. 調査時期： 研究 9 と同じ。

3. 調査内容： 研究 9 と同じ。このうち本報告では＜共感＞（「友だちのうれしい（怒っている・悲しい）気持ちを自分のことのように感じる」）に影響を与える要因として＜表情＞＜言葉＞＜抑制＞＜理解＞について検討することとした。

結果と考察

1. ＜共感＞の情動発達得点： Figure 1 に情動発達得点のうち＜共感＞領域における「気になる」児童と典型発達児の平均得点を示した。典型発達児の平均得点が 3.6 であるのに対し、「気になる」児童の平均得点 2.7 と低かった。研究 1 から最も顕著に差が生じる項目であることが分かっている。

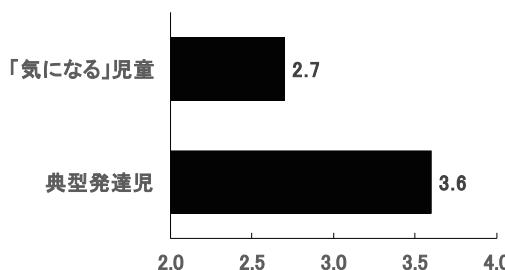


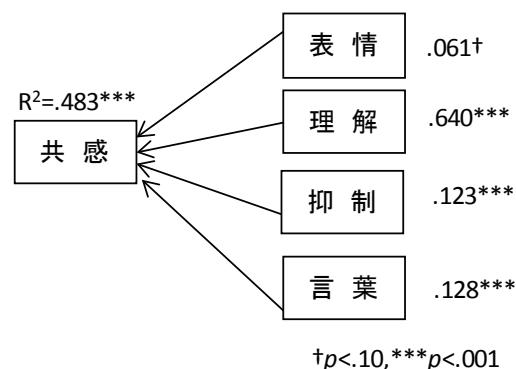
Figure 1 「気になる」児童と典型発達児の＜共感＞得点

2. 共感に影響する要因： ＜共感＞を従属変数、＜表情＞＜言葉＞＜抑制＞＜理解＞を独立変数とする重回帰分析を行った。Table 1 には変数間の相関係数を示した。また、Figure 2 にはそれぞれの独立変数からの＜共感＞への標準回帰係数を示した。ここから、＜表情＞からの＜共感＞への標準回帰係数は 10% の有意傾向にあり、＜理解＞＜抑制＞＜言葉＞は 0.1% 水準で有意だった。なかでも他者の情動状態についての＜理解＞が、他者の多様な感情に共感する上で重要な要因になっていると考えられた。

Table 1 變数間の相関係数

	表情	言葉	抑制	理解
表情	1	-	-	-
言葉	.704 ***	1	-	-
抑制	-.363 ***	-.276 ***	1	-
理解	.246 ***	.238 ***	.078 **	1
共感	.270 ***	.297 ***	.098 ***	.673 ***

** $p < .01$, *** $p < .001$



† $p < .10$, *** $p < .001$

Figure 2 ＜共感＞への各領域の標準回帰係数

付 記

なお、本研究は科学研究費補助金（基盤研究 B）「幼児期・児童期の情動発達アセスメント・スケールの開発と保育・教育への応用」（研究代表：本郷一夫）の助成を受けて行われた。